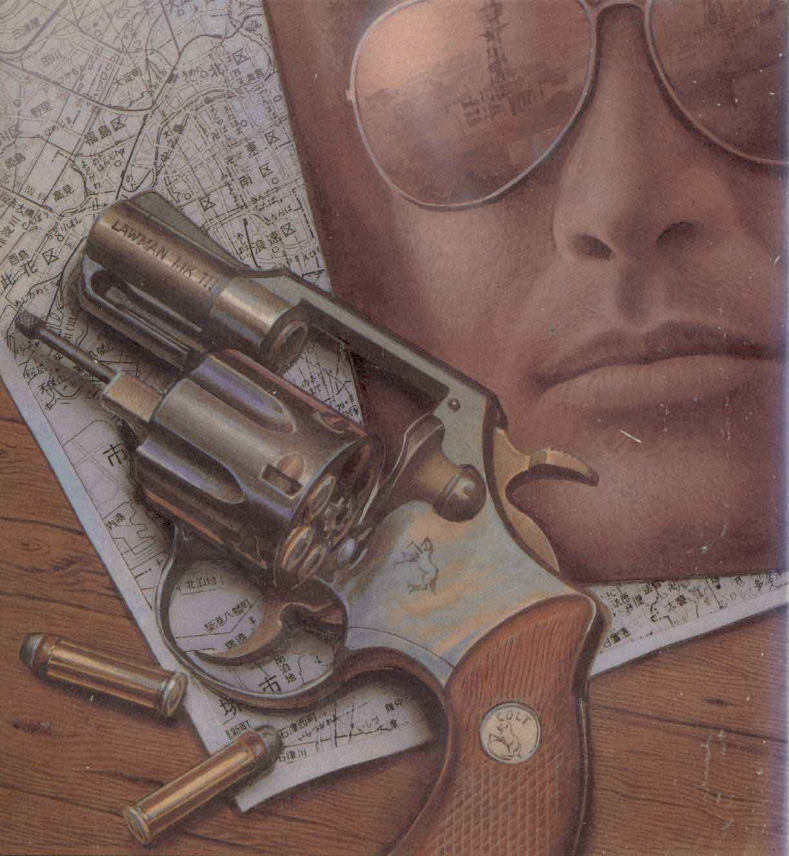




K A P P A N O V E L S

長編ハード・ロマン 書下ろし

新・大阪極道戦争

ごく どう

福本和也

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編ハード・ロマン 新・大阪極道戦争

昭和60年9月25日 初版1刷発行

定価680円

著者 福本和也

発行者 大坪昌夫

印刷者 塚越栄夫

東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京 6-115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Kazuya Hukumoto 1985

ISBN4-334-02615-X
Printed in Japan

しん おお さか ごく どう せん そう
新・大阪極道戦争

ふく もと かず や
福本和也



カッパ・ノベルス

目次

第一章	焰 ほのお の噴出	5
第二章	悪の秀才	37
第三章	静かなる倒産	67
第四章	謀略 うず の渦	88
第五章	情報戦	123
第六章	陰の男X	159
第七章	闇の相場師	198
解説	心・技・力 さんみ 、三位一体の極道シリーズ	246

胡桃沢耕史

本文イラストレーション／加藤孝雄

第一章 焰の噴出

1

金剛山地は大阪府と奈良県とにまたがる山脈で、北の二上山から西の紀見峠にいたる弓形の山脈である。最高峰の金剛山が標高一二五メートル。さして高い山ではないが、その割りには山容は変化に富んでおり、いたるところに小さな沢やガレ場があった。

十月中旬、二人の若者が二上山にとりついた。一人は福山昌二といい、いま一人は松倉賢といった。二人とも十九歳で、大阪のK大学理学部地質学科の一年生であつ

た。

二人の目的は金剛山地の縦走である。といっても、山そのものがテーマではない。主峰の金剛山には、南北朝時代、楠正成がたてこもった千早城があり、役小角の修行場として知られている。ブナの群生でも知られ、冬の霧氷は有名だった。二人とも歴史や植物には興味がない。二人を惹きつけたのは、金剛山地を構成する地質であつた。

山は全山紅葉していた。灰色の雲が空を蔽い、いまにもひと雨きそうな空模様であつたが、その天候のもとで紅葉がひとときわあざやかに映えているのだった。

地形は奈良県側が險阻で、大阪府側は比較的ゆるやかである。二人はほぼ尾根伝いに歩いた。最初のうちは道はなだらかであつたが、標高五一七メートルの水越峠にさしかかったあたりから、起伏が激しくなった。

「ひと休みしようや」

と松倉がまず音をあげた。

「ああ」

と応じて福山も路傍の石の上に腰を下ろした。二人と

もまだ唇のあたりに少年の稚^{おとこ}さをとどめている。大阪府側はブナの原生林であるが、奈良県側はV字状のガレ場になっている。

持参した水筒の水を飲んで、福山が空を見上げた。

「雨になるかもしれへんで」

「そうやな」

二人とも一応の登山装備をし、雨具も持参している。

「ま、雨になってもどうってことはないやろ」

「やっぱり、一日では無理やったな。キャンプの用意をしてくればよかったんや」

「そんなこというても、いまさらどうにもならへんよ」

松倉は腰を上げてガレ場の縁^{エッジ}に立った。小用を足すべくズボンのファスナーに指を掛けた。その手が途中で停まった。

「……………」

深く切れこんだガレ場の底に、古いキャンパスに包まれた棒のような物が横たわっていたのである。キャンパスは長時間、風雨に晒^{さら}されていたらしく、白く変色して汚れきっていた。

（何やる？）

松倉は瞳を凝らした。キャンパスは無数の朽ちた落ち葉の中に半分以上埋もれており、その上には雑木の枝がかけられている。なんとなく全体の状況が不自然であった。

「どうしたんや」

と福山が声をかけてきた。

「ちよっと来てみ」

手招きに応じて福山は松倉と肩を並べた。

「ほら、あれ」

と松倉が眼下のキャンパスを指さした。福山も目を凝らした。

「キャンパスやないけ」

「ほら、右の端や……」

福山はそこに視線を固定させた。キャンパスの端がめくられて、何やら白いものがのぞいている。

「あれ、人間の骨やと思えへんか」

「まさか」

福山は言下に否定した。仮に骨だとしても犬か何かで

あろう。しかし、キャンパスの形はあきらかな棒状だった。犬の死骸をくるんだにしては長すぎる。それにいわれてみれば人間の骨のような気がしなくてもなかった。

「おれ、下りてみるよ」

松倉がいった。

「物好きなやつぢやな。下りるのは勝手やが底までは五メートルはあるで、どないして下りるつもりや」

V字状の斜面は赤土が露出しており、足がかりになるような突起はなく、どちらかといえばオーバーハングになっているのだった。

「何かの役に立つと思うてザイルを持ってきたんや」

松倉はリュックザックから直径五ミリほどの細いナイロンザイルを取り出して、尾根の反対側のブナの樹の幹に縛りつけた。幾度も引っ張ってみて固定されているのを確かめてからザイルを伝って慎重に斜面を下りた。

「どや」

覗きこんで福山が訊いた。それには答えず、松倉は骨らしきものが覗いている反対側のキャンパスをめくった。

途端に、

「ぎゃー！」

と絶叫が山の静寂を引き裂いた。次の瞬間、松倉は必死の形相で遮二無二ザイルをよじ登った。

斜面を登りきると、エッジにへたりこんで大きく肩で息をした。

「やつぱり、人間か？」

「そ、そや……」

あえぎながら松倉は首を振った。

「男か？ 女か？」

「わ、わからん。顔の肉が半分以上融けかかっていた」

2

二人の学生が山を下りて千早赤坂町の派出所に変死体発見を通報したときは夜になっていた。

派出所からの一報を受けた所轄の富田林署は、数名の刑事課員を千早赤坂町の派出所に急行させた。捜査員たちは、二人の学生から事情を聴取した後で、二人に案内

させて水越峠に登った。

浦谷といういちばん若い捜査員が松倉が残したザイルを使って現場に下りた。すぐに上がってきて、

「間違ひおまへん、男性の死体です」

と報告した。現場が險阻な山中なので投光車が近づけない。事実上、夜間の収容作業は不可能であった。そこで、浦谷他一名を現場保存のために残し、他の捜査員は下山した。この段階では他殺とは断定できなかった。しかし、キャンバスを巻きつけての自殺は考えられなかった。とりあえず府警本部に報告を入れた。

翌朝、夜明けを待つて駆けつけた府警捜査一課の係官も混じえて、綿密な現場検証が行なわれた。現場は奈良県側に湾曲しており、大阪府の境界内に入っていたのだった。

鑑識が現場の写真を撮った後で、キャンバスを慎重に斬り裂き、死体を露出させた。全裸であった。推定年齢三十〜五十歳。身長一七一センチ、腐乱の進行が激しく、顔面の肉などは半分ほどになっているが、空気の乾燥した高地のせい、死体は半ばミイラ化していた。

検視官が綿密に観察して所見を述べた。それによると、顔面は暗紫色を呈して腫脹し、頭蓋骨の左部と右眼が完全に陥没している。全身いたるところに強い打撲傷様の形跡が認められ、前胸部、下腹部にかけては地図様の変色が見られる。直接の死因はこの場では特定できないが、他殺と思われる。

死体はキャンバスごと慎重に担架に乗せて解剖のために〇大学医学部に運びこまれた。

長時間にわたって解剖が行なわれた。その結果、

一、死後二〜三カ月経過している。

二、鈍器のような物で頭蓋骨を強打されたのが死因。

三、直接の死因は頭蓋骨打撲であるが、全身いたるところに殴打の痕跡があり、ひどい拷問を受けたものと思われる。

四、胃の内容物は皆無で極度の飢餓状態にあったと思われる。

以上のことが判明したが、肝心の身元確認の手がかり

がなかった。

富田林署に捜査本部が設置され、死体の身元を割り出すため、捜査員を隣接の奈良、兵庫、和歌山、京都の各府県警に派遣し、その協力を得て、家出人、所在不明者等の中から被害者に類似する者を抽出する作業を開始した。

その一方、府警本部鑑識課では、夜を徹して被害者の指紋を採取する作業がすすめられた。

しかし、被害者の両手は、指先にかけて腐敗がはなはだしく、そのうえゴミやカビが付着して、通常の方法では採取不可能な状態であった。

そこで、独特の方法で採取に取り組むことになった。

まずやわらかくブラシをかけて洗浄する。次に半ばミイラ化していたので、グリセリン（二百ミリリットル）、水酸化ナトリウム（三グラム）、水（七百ミリリットル）の混合液に二十四時間ひたして膨化させた。

指頭の凹凸をなくすために、ゆっくりとやわらかく揉みほぐして、皺を軟化させる。

アセトンを含ませたガーゼで汚染や付着物を拭きとり、

乾いたガーゼで水分を除去し、シリコンラバーで採型する。一度で紋様の採取ができない場合は、この作業を根気よく数回実施する。

採取したシリコンラバーに水溶性コアテックスを塗布して皮膜をつくり、これを剝離してインクを付着させ、白紙に押捺する。

これはコアテックス法と呼ばれているのだが、慎重に作業をすすめた結果、五日目によりやく不鮮明ながら採取に成功した。そして、警察庁に指紋照会したところ、昭和五十五年二月に、大阪府警の都島署が暴力行為で逮捕したことがある本籍沖縄県島尻郡豊見城の高橋富造（39）と判明した。

3

「やはり、高橋は殺られていたんですね」

若頭の金城繁がいった。天六の塚田組本部の一室である。若頭補佐の櫛山尚治の顔も見える。

「うむ」

宝田徳一がうなずいた。

気のせいかな、顔色はまだ蒼白いが、頑丈な体軀に衰えは見られなかった。

宝田徳一が大宮町の自宅のマンションの前で何者かに狙撃されてから四カ月経っている。銃声に驚いたマンションの住人が一一九番をし、救急車で旭区生江の病院に運ばれたのだ。

弾丸は二発とも下腹部にとどまっていた。一発は腸骨櫛部、一発は盲腸部、拳銃が小口径だったのと、徳一の皮下脂肪が厚かったので致命傷にいたらなかったのだ。ただちに摘出手術が行なわれた。ほとんど輸血の必要がないほど手術はうまくいった。徳一の身柄はICU(集中治療室)に移された。

『塚田組の二代目撃たる』

この報は文字どおり関西の極道の社会を震撼させた。(いったい、誰が?)

誰がやったにせよ、ただですむはずがない。宝田徳一は、数カ月前に南西会の荒巻兵助親分によって直系の若い衆にとりたてられ、同時に南西会の理事長(若頭)に

就任したばかりだったのだ。南西会の直若で、しかもNo.2を狙撃してただですむはずがない。大阪の夕刊マスコミは、

「相手は大場組か？」

南西会のヒットマン閥に潜入！」

と派手に書き立てた。

警察の動きも素早かった。病院の前にジュラルミンの楯を持った機動隊を配置したばかりか、塚田組、南西会本部、それと対立する大場組系の前にも機動隊を貼りつかせた。

手術後四日目に危機を脱して、徳一は九階(最上階)特別室に移された。世間は固唾を呑んだ。宝田徳一は火の玉のような男なのだ。マスコミは、競って徳一の過去を書き立てた。

『宝田組長は、十八歳の春に自動車窃盗罪で少年鑑別所に送られた。そこで知りあった年長の少年に教えられて塚田組に身を投じた。そして、とんとん拍子に出世する

と、独力で西成に進出した。

そこでボクサーくずれの島岡隆明たかあきという男と激突、伝説のハンカチ決闘が行なわれたのだ。

場所は氷雨が降りしきる天王寺公園の野球場。一枚のハンカチの端をふたりで咥え、泥まみれになってドスで渡りあったのだ。島岡もひとかどの男だった。全身血まみれになってもハンカチを口から離さなかった。

この凄絶な決闘で島岡を殺害した宝田組長は、少年刑務所に送られ、成人と同時に北海道の網走刑務所に移管された。網走では幾度か仮釈放のチャンスがあったが、そのつど事件を起こして拒否、満期まで勤めて出所した。宝田組長は、一瞬の光芒こうぼうに生きる男なのである』

そのような男がこのまま引きさがるはずがない。

必ず何かが起こる。

むろん、警察も同じ見解であった。現に病室の前は屈強な組員がガードして、妻の圭子と組の幹部しか入れなかった。

（誰がやったのか？）

報復の暗殺者を放つにしても、それを知るのが先決だ

った。櫛山たち幹部は天六の事務所で鳩首協議した。

「尼崎の荒瀬組の線は？」

金城が質問した。

「それはないでしょう」

櫛山が首をかしげてこたえた。

「荒瀬組は解散寸前ですからね」

「串本組の残党の線は？」

「それも、たぶん、ないと思います」

櫛山の考えにはそれなりの根拠があった。話したこともない標的を何日も追い続けて、相手のタマ（生命）をとるのは容易なことではない。第一、ちゃんと仕事ができるテッポウ玉がないのである。

「いまだきの若い連中はチャカを持たせると、相手の組の窓ガラスを撃って『やってきました』と得意顔で帰ってくる。タマをとるなんて夢のまた夢だ。ガラスを割るのがやくざの『喧嘩』だと思っているんだから始末が悪い」

とある組の幹部が嘆いているほどなのだ。

仮に確実に仕事ができるテッポウ玉がいたとしても、

その心境は複雑だった。何度も迷いためらうのである。

妻のこと、子供のこと、親のことなどが脳裏をよぎるという。それと確実な代償がないかぎり、彼らは拳銃の撃鉄を引かないのだ。一人のタマをとれば十五年の懲役はかたい。代償とは、受刑中に妻子を援助する、出所後は手厚く迎えられる、二段跳び三段跳びで幹部に出世することだった。そのためには、何よりも出所時に組が存在していなければならぬのだ。荒瀬組や串本組の残党ではありえない、櫛山が主張する理由もそこにあった。

では、どこの組なのか？ となると、櫛山にもかいかいもなく見当がつかなかった。見舞客の応対に忙殺される一方で、大阪じゅうに組員を放った。上条久もその一人であった。上条は西成にしなりにもぐりこんだ。これはまたとないチャンスだとふるい立った。もし相手が判明すれば、何が何でも相手の組の組長のタマを自分でとるつもりだった。幹部に命令されてやるのではない。この稼業は上の顔色や考えを下が読んで、黙って行動するもんや、上条久はしっかりとそう肚はらをくくっていた。

上条久は天下茶屋てんがちやの出身だった。中学のころからぐれ

だしてすぐ北隣りの西成界限に出没していた。そのころにハンカチ決闘の話を目にし、徳一に憧れていたのだった。

いまの若い衆は、仲間にはききずられてこの世界に入っただけのものが大半である。そんな連中がヘッピリ腰で相手のガラスを割るのである。上条久は内心でそんな連中を軽蔑していた。

拳銃は実弾五発付きで百万円近くする。それでガラス割りをされたのでは、親分たるものはたまったものではない。

壮大な無駄づかいであった。

上条久は、自分はこの世界でしか生きる途みちはない、と根性を据えている。それだけに、どうしても男にならなかったのだ。

狙撃に成功して、相手のタマをとったからといってこれが成就するわけではない。逮捕されて以後に、真に男になれるか否かの試験に直面するのである。

大阪府警の極道に対する取調べはハンパではない。本当に自分の意志で殺ころったとしても、必ず親分に命令され

たはずだ、と峻烈に責めてくる。あの手この手でその調書をとろうとする。ここでうたつてしまえば、親分まで長期刑にひきずりこむことになり、男になったとはいえないのだ。

警察との激しい葛藤に耐えるには、強靱な精神力が必要であった。

(あの親分なら人生を捧げても悔いはない)
社長と呼べと幹部から命令されているが、上条には、やはり、親分がふさわしいように思えるのだった。

飛田本通りをぶらぶら歩いているとき、頓狂な声で呼びとめられた。

「よう、久やないけ」

柳川やなぎがわといって、中学時代に一緒にぐれていた仲間だった。

「なんや、おまえか」

「なんややあらへんぞ」

キヨロキヨロと周囲を見まわして、

「ちよっとつきあえや」

と旧飛田遊廓に近い飲み屋に連れこんだ。

「おばはん、座敷を借りるで」

と小座敷に上がりこんだ。

「おまえ、いま何してるんや？」

上条が訊いた。

「うどん屋の出前や。それより、おまえ、偵察に来たんか？」

声を低めて訊いた。狐のように目が吊り上がった男である。上条には何のことやらわからない。黙っていると、「義勇団の偵察に来たんやろ。さすがに塚田組、早耳やな」

ますます何のことやらわからない。

「義勇団で何や？」

「大日本義勇団のことやないか、とぼけんでもええ」

「極道か？」

「表向き右翼ということになっているが、常盆も持っていたんや」

常盆とは定期的に開いている賭場のことである。

「おまえは、ほんまに知らんのか？」

柳川は念を押した。このとき、

「ご注文はなんだす？」

と女将が敷居際に顔を覗かせた。

「とりあえず二級酒を二本、肴は串カツでええ」

柳川がオーダーした。その間に上条は目まぐるしく思案をした。大日本義勇団とやらが今度の事件と関係があるらしい。ここはひとつ偵察と思わせ、飲ませて聞き出したほうがトクだ。こいつはもともと口がかるいのだ。

「ま、飲めや、久しぶりやないか、ドンドン飲んでくれ」

上条は調子よく酒をすすめた。日本酒、ビール、ウィスキーとチャンポンで飲ませた。酔いがまわったころを見計らって、

「シマではどんな噂が流れてるんや？」

と聞きだしにかかった。

「噂も糞もない、義勇団の深沢はんが自分でやったと吹聴して歩いてるといふ話や」

「義勇団のアタマは誰や？」

「その深沢大吾やがな」

「深沢が自分でうちの親分を襲ったのか？」

「いや、じっさいにやったのは高橋という男らしいで」

4

上条久がもたらした情報は塚田組の幹部を緊張させた。ひとり金城繁だけが首をかしげた。金城はかつて西成で小さな組を持っており、組ごと徳一に吸収されただけに地場の情勢に詳しかった。彼がシマにいたころの深沢大吾は一匹狼のぐれん隊であった。一見重厚そうであるが、根は軽佻浮薄。とても大それたことのできる奴ではない。現に宝田組長をやったのは自分の組織だといふらしい。いる事実が妙であった。そんなことをすれば狙われるだけではないか。売り出したい一心のホラではないか？ それにしても手段が愚かすぎるように思えるのだった。何はともあれ正確な情報が欲しい。そう考えて金城自身は西成に足を運んだ。西成には大小五十数組もの暴力団の事務所がひしめいている。金城は南西会系と大場組系は意識的に避けて、幾つかの中立の組の事務所顔を出した。塚田組の若頭の来訪とあって、どの組も下へも置かぬ扱いだった。

金城はそれらの組で、深沢大吾が言いふらしているのは事実だと聞きだした。正確には吹聴したのではない。仲間の酒の席で得意顔で洩らしたのが、瞬く間に噂としてシマじゅうにひろがったとのことであつた。

テッポウ玉の名もわかつた。

高橋富造

その名を聞かされて、櫛山尚治は衝撃を受けた。叩き潰した串本組の若頭ではないか。

(間違いない、奴だ)

深沢大吾が背後にいることも間違ひはない。

金城と櫛山は病院に駆けつけて、徳一に報告した。報告しただけで、指示を仰ぐつもりはない。親分の顔色や考えの先を読んで行動するのがこの稼業のしきたりだった。

ベッドの上にあぐらをかいてふたりの報告を聞き終わ

った徳一は、おだやかな口調で質問した。

「それで、どないするつもりや？」

徳一はバジャマの上に薄い布地のガウンを羽織っている。

「……………」

金城と櫛山には、徳一の質問の意味が呑みこめなかつた。やられたらやりかえす、それがこの稼業の鉄の掟ではないか。

「おまえらの気持ちはわかる。しかし、わしが許さん、放つとけ」

「放つとけですって？」

櫛山が目を剝いた。

「ああ」

「し、しかし、それでは……」

「放つとけばええ」

「理由を聞かせてください、ただ放つとけだけでは納得できません」

「しやないな」

と徳一は苦笑した。

「ええか、今度の件はテッポウ玉を放つて相手のタマをとるといふような戦争やない。これは経済戦争なんや」

「……………」

「わしの見るところ、深沢は最終的には大場組の傘の下